

鷲見郷から高鷲へ拓く力(2)

【馬淵 作成】

【会報 高鷲の文化財】99号の続き

2 古代から中世の続き

その後鷲見氏は、篠脇城主東氏に従属するようになり、上剣の阿千葉城に居城させられたが、天文10(1541)年鷲見貞保の時、東常慶に攻撃されて阿千葉城の鷲見氏は滅んだ。阿千葉城主鷲見貞保の墓ではないかと言われているところが中津屋の国道156号線沿いにある。また、1585年には天正の大地震が起こり、折立地区陥没し現在のようになる。

その後鷲見城主鷲見兵庫は八幡城主遠藤盛数の家来となり、兵庫の子忠左衛門は遠藤慶隆に仕えて、慶長5(1600)年の八幡城の戦いで八幡の愛宕にて戦死した。その後鷲見城は廃城になったが、一族は伝右衛門と名乗り、鷲見郷の穴洞村で帰農し現在まで続いている。



鷲見忠左衛門が戦死した八幡愛宕の5人塚

3 近世

戦国時代の内乱が終わり、諸大名は開墾運動を奨励し、各地で新田開発が盛んに行われた。寛文4年の遠藤常友の封地のうち、鷲見郷関係は鷲見郷8ヶ村の名があるが、向鷲見村は陰地鷲村となっている。鷲見郷でも穴洞村に富田新田が開発され、正ヶ洞に用水が引かれるなど農民の自発的意志で開発が進んだ。

為政者が農民を犠牲にしてまで搾取主義を貫き、農民は悲惨な生活が続き、百姓一揆が起こった。その例として、遠藤常春時代に起こった延宝騒動や郡上の領主が井上氏から金森氏に変わり、金森氏は二度の国替え、江戸屋敷の火災、将軍の側近くに仕える役職で、生活が派手に成り財政が苦しくなったので、年貢の取り方をこれまでの定免取から検見取に変えようとした。これが百姓たちは死活問題となることから反対して、集会を開き、傘連判状を作成して一致団結し、検見取しないように藩主に訴えた。これを宝暦騒動(郡上一揆)といい、鷲見郷からは切立村の喜四郎や向鷲見村の弥十郎・五郎作らが参加し、駕籠訴や箱訴を繰り返し、金森藩及び幕府の幕閣までが、取りつぶし・切腹、改易などの処罰されることになった。百姓側の数は、打首獄門14名、牢死18名、金森氏側は改易、役人の死罪2名の処罰であった。鷲見郷では向鷲見の弥十郎、五郎作が鷲見郷で打ち首、牢死した人は切立村の喜四郎、西洞村の与左衛門、孫次郎、鮎走村の円七、弥七の5名であった。郡上藩の領主が青山氏に変わり、宝暦の郡上一揆が終息すると鷲見郷に落ち着きが出てきた。



向鷲見村五郎作の庭にあった紅梅・白梅

文化年間(1800 年頃)になると驚見忠左衛門保隆父子(驚見家一統とは違う人物)が穴洞村一帯を開墾した。豪農である忠左衛門はその富力を持って多くの人夫と費用を費やして文化 9 (1812)年 8 月に開田難工事を完了し、富田新田と称した。特に灌漑用水路の掘削は難工事であって水源を大日ヶ嶽の中腹より引き千数百米のいくつかの急峻の箇所を迂回して作られた。今でも「金造ヶ端」「けずり岩」などの地名が残っている。万延元(1860)年頃より正ヶ洞用水や岩高用水なども作られて田代新田(驚見)、庄会新田(中切)、梁島新田(切立)、折立新田(西洞)など多くの新田開発がされた。

ここで参考までに江戸時代の郷帳石高の資料を載せる。

正保郷帳：鮎走村 342 石、正ヶ洞村 93.54 石、中切村 136.111 石、穴洞村 59.03 石、西洞村 144.088 石、驚見村 37 石、陰地驚見村 230 石、切立村 80 石

元禄郷帳：鮎走村 332.123 石、正ヶ洞村 93.54 石、中切村 93.271 石、穴洞村 59.03 石、西洞村 38.143 石、驚見村 61.926 石、陰地驚見村 255.730 石、切立村 123.660 石

金森藩時代の石高：鮎走村 281.720 石、正ヶ洞村 70.580 石、中切村 111.9 石、穴洞村 18.193 石、西洞村 66.407 石、驚見村 26.186 石、向驚見村 238.170 石、切立村 75.810 石

青山藩時代の石高：鮎走村 349 石、正ヶ洞村 92 石、中切村 152 石、穴洞村 40.5 石、西洞村 149 石、驚見村 63 石、向驚見村 257 石、切立村 135 石

4 近代

慶応 3 (1867)年、江戸幕府は政権を朝廷に返し明治政府が発足した。政府は翌年に政治の方針(五箇条の御誓文)を示して、様々な改革に取り組んだ。明治 2(1869)年には大名の土地と人民を朝廷に返させ(版籍奉還)、明治 4(1871)年には藩を廃して府や県を置き(廃藩置県)、政府が全国を治める仕組みを作った。郡上でも郡上藩が郡上県となり、町村の編成や政治の仕組みが変わっていった。

明治 5(1892)年になると、どの村でも戸長というものがおかれ、今までの庄屋、組頭、百姓代はなくなり、お寺が扱っていた人別帳をやめて戸籍を作り、戸長が取り扱うことになった。このときの驚見郷の人口を見ると、鮎走村 835 人、切立村 429 人、正ヶ洞村 176 人、中切村 252 人、穴洞村 85 人、向驚見村 454 人、驚見村 718 人で西洞村は資料がなく不明でした。

明治 8(1875)年になると、今まで八つの村で構成されていた驚見郷は三つの村に合併し、鮎走村と切立村が合併して「鮎立村」(人口 1380 人)に、正ヶ洞村と中切村と穴洞村と向驚見村が合併して「大驚村」(人口 1041 人)に、驚見村と西洞村が合併して「驚見村」(人口 1600 人)となった。なお、すぐに驚見村は後に元の驚見村と西洞村に分かれた。

明治 30(1897)年になると、鮎立村、大驚村、驚見村、西洞村の四村が合併して一つの村となった。この時、村名をどうするかで、富田新田の富田にするなど色々な意見が出たが、驚見郷の「驚」を一字取り、郡上郡の中で一番土地が高いところがあるので「高」の字を付けて「高驚村」と名付け、村長に下田十郎兵衛がなり、大正 9(1920)年には旧役場が新築された。



新築された旧役場